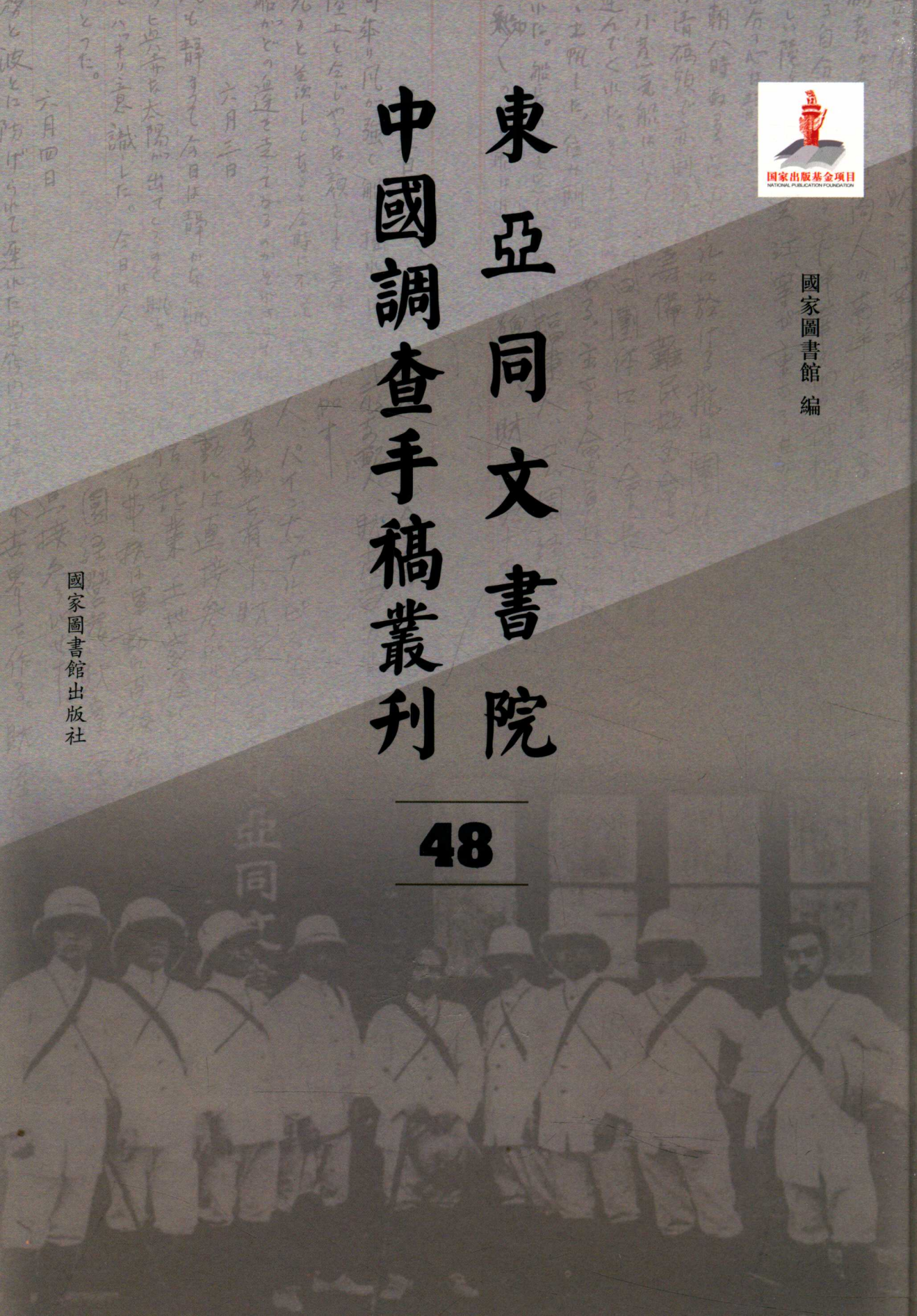


國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

48

國家圖書館出版社



國家圖書館
編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

48

第四八冊目錄

昭和七年（一九三二）旅行日誌（第二十九期生）

井上正彦

第六十四卷 一

平松久敬

第六十六卷 五五

森田重豬

第六十九卷 一八三

小野壽恵夫

第七十卷 三二三

中島有吉

第七十一卷 三七七

稻垣信行※

第七十二卷 四六五

鹿島満周

第七十三卷 五九一

昭和七年度

旅行日誌

遊歴第十八班

第二十九期生

井上正彦

本館

第六十四卷 旅行日記（續第十八班）

六月五日

大旅行へ行くお花の日だ

入峠以来真に憧憬の的だった大旅行は遂に

今離別の歌に送られて行く吾々三人の

心中こそ歡喜以外に何があるだろうか、爆竹の

音は今高らかに鳴り響いて居る吾々の前途の

祝すかり加へに！

江南の緑りしななとあり虹橋路 それは私達のバウ

カイスをつらうだ、いかに今其の好むは遠く清之

行き只脳裡に内りくは大旅行の心を

旅は人生の道だ、さうなれば道理を！

吾々の所へ先きは身は山々をなす、剣山や峯々あり

かゝる、或は行々先きには絢爛たる花卉、乱れ
咲く樂土にあらう。喜怒哀樂は人生の常だと云
聯想は錯綜して盡くを知うなへ、わくして希望
に満ちた吾々三人を乗せ、自動車は書院をお登道
ちに大連碼頭に赴く。碼頭には既に先生が、並に諸先
輩の方々が見送りに来られて居る。

やがてお帆の知り世を、万才の声！吾々乗る長春丸
は懐しの上海を、親愛なる友を後に、と告ぐ。さう
溺る水泡を残して、一路青島へとお帆——たのであ
る、さあ！大旅行の第一歩が拓いたのです
左様なり上海！

六月十六日

今日は海上だ、

私達の船室は刑土の如く三等だ、而して座敷部屋
だけあるが、希望に充ちた若人には旅行の気分が
はいや、下宿する者もあれば、行くと先々、
一丁座敷に耽つて居る者もあり、船室は和気霽々たる
ものがある。向い、座敷は白木の口しやんで一杯
だ、彼等はワリーの帝政時代、華美豪華な生活を
追つて居た人達だろう。毛膚特有の虚栄
心は元うち彼等ではあるが、現下は生活の儉
すれ、青島或は芝罘へ出張かに行くと、其の
心情が衰はれに感ぜられ、或る者はクラホーン

に其の昔を想ふ所、如く、尊嚴なつた、陶醉し
 或者はシヤズに而して酒に、其、噂由を食ふ、如く、リ
 スムに合はせつつ、肩や手を微動に動かして居る者
 や、我々の周囲は大体三人なり、

エングラの音、三十一回轉スル、スル——はよ、微かな
 微動——レガナルは音だ！

船は北へく——と突進——て居る。私は、今面がかり
 學校を出づる時の事、三十一明日着く可き青島
 は、如何なるやうなところかと想像しつつ何時
 し、ぬきりに着て入るの、であつた。

六月十七日。

青島！

吾々の船は丁度今青島を前に見て静かに港
に入るとして居る、五龍の霧の中から次第く
にはつかりと現れつつある青島、青色と淡白と
そして紅色とで色彩うれた、憧れの樂土が次々に
接近しつつあるではないか。

午前九時船はひとりと岸壁に着くと直ぐ上陸
諸先輩の即世話に就き、花月旅館に投宿、一先
づ打寛ぐ、船上より見た青島は海、それは吾々の河童
達は鋭い魅力だ、女中芝の圓けは海水浴場は直
ぐ近くにありさうだ、早速お掛け、末お水泳

レスンには早いのだが、吾々には問題下は無い、又て
水の冷さは堅氷張味を与へ、斯うく如く、二三時
由を海に戯む、後宿に歸へり、青島の事
年と謂ふ

青島と日本との關係

大正三年八月欧州の戦乱勃発により我口は日
英同盟の情誼に因り独逸に宣戦を宣告
し干戈を交へ同年十一月七日遂に青島を占領
し独逸の有した利益を悉く掌握し、日本守備
軍が治下に置き、砲臺の一部を壊はし備砲の
大部をも取揃ひて一高港とす。

その後青島は正付に至り八年向軍政を布いて

あつたが大正十六年以降民政に改りた
結果青島は独逸時代より更に突展
を遂げたりである、其後日本政府は大
正十一年十二月十日、山東鉄道に對する
借款権を留保した外は殆ど無條件に支那
政府に引き渡し、新たに日本總領事館
館中が創設された留民の保護、突展及び
支那官憲との接衝にあつたことになつて
ある

市街の状況

独逸の市街計畫は景勝の南より起され
丘と海と巧みに利用して日ありのよい、ゆたう

一、住宅地を設け、其の沿ふて將來延びるに
 都合のよい支那人向き商業地区を作つて
 其処には一棟の支那式家屋を建てさせず
 全部煉瓦又は石造の二階三階建、道路は
 狭くて二八回、大通は十五回幅の中央に広く
 車道を取つて左右両側に人道を設け、街
 路樹は儀よく植ゑられてあり、此の總面積
 四十四万坪ばかりであるが、占領後は軍隊と多
 数の日本人が入り込んで来たため、其れ大に拡張
 され、市街地總面積四十五万一千六百余坪
 道路延長二万三千坪となり、能率時代より二倍
 に拡張されたが、世帯的不況のため、守備し物

げと云ふ大打撃を蒙り、反對に支那商人が抬頭
し上海方面から入り込んで漸次勢力を増大
して来た。

上下水道と首路

青島は独逸の植民に始まり日本、支那の継承に因
て美しい緑は蔽はれて居るが元々礫角の秃山秃丘
だらけであつたため、従つて老樹なく地質、硬くと
降雨量の少ない影響は水を得るに困難を感じた
市街の背後から東方崂山方面に引いて幾つかの
河はあつて、殆ど名ばかりで雨降れば必らず氾濫する
雨の無いつ時は河身一涸の水も流れを収斂してある。
独逸人は最初市中は多量に井戸を掘つたが

水質悪く飲甲は高くない。また、水源も他に求
め所の東也一里許り。海泊河の礫は数口、井戸
を掘り其の地下水を唧筒で市街の道沿の丘の
上の貯水池に押し上げ、之を市内に供給して、如何
湧水量は米少々なく一日僅かに八百噸位である。
から到底市中の需要を充たすことが出来ぬ。
そこで更に拡張計畫を立て東也三里許りの
李村河の地下水を引へた。地の工事は規模も余
程大きく数年の日数を費したが一日約四千噸の
水を今の青島神社の上にある若鷺山の貯水池
に吸み上げ得る。丁卯十三年工事完了し
漸く飲料不良缺乏の禍から免れ、幸や出来た。

然る翌年が日独戦で独逸軍は李村から退去し
際水道の主要な部分を悉く破壊して丁いたため、
青島への送水全くと不可能に落入つた。日本は占領
後直ぐに復旧は著手し工事を急いで翌五年八月漸く
竣工此の李村所を以て主たる水源地海泊河を豫備水
源地とした。然し陥落後沢山の人が入り込んで人口が急激
に増加した。列は漸く癖を日本人の用水量と見合はしてこれ
位の供給では足りなくなつた。故り翌大正五年には李村水
源地の井戸を三十箇を増して送水能力を五、四、五、百、石
まで引揚げ海泊河に最大一、四、五、百、石まで増した。が
これでも足らずに市中殊に山の年の高台にある家は常に
断水の厄に悩まされたりして更に東へ七哩の白沙河の地下水